

中部の

エネルギーを 築いた

人々

伊勢志摩の開発に貢献した
事業家・太田小三郎

伊勢の国は本州の中央に位置し、風光明媚で東部・南部は伊勢の内海を抱いて、伊勢平野が南北に伸び、背後に鈴鹿・紀伊の両山脈が走って海にそそぐ河川の水源地となっている。また、伊勢地域は外海に近く風土も温和で、宮川・五十鈴川・勢田川・外城田川などの河川が市域を流れ、住民生活に適したところである。

伊勢は、古来日本人の心のふるさとといわれ、伊勢の地名は神宮の同意語として用いられてきた。歴史的には、伊勢市は神宮の存在をとおして開発され発展してきた神宮門前の集落都市である。弥次さん、喜多さんの「東海道中膝栗毛」で語られるように江戸時代から庶民の間でお伊勢参りが流行した。

最近では2013(平成25)年の伊勢神宮二十年遷宮時には1,420万余の過去最高の参拝者数を記録した。また、2016(平成28)年、伊勢志摩サミットが開催され、日本の美しい自然、豊かな文化、神聖な地であることが世界に紹介された。

今月は、明治時代維新時から大正時代にかけて、この地域の産業、特に観光開発の立場から電力・鉄道事業などの先駆者であった太田小三郎を紹介する。



太田小三郎
[1846(弘化3)~1916(大正5)]
出典:伊勢市史]

1 生立ち

太田小三郎は1846(弘化3)年、鷹羽寿一郎の3男として豊前国英彦山で生まれた。幼名は匡一、長山と号した。家は累代豊前英彦山の執当職で、長兄の浄典は幕末勤皇の大義を唱えこれに殉じた。敬神家であった小三郎は豊後日田の広瀬青邨の門に学び、沈毅果斷濟世の志を有し、王政中興京都に入り三条家の知遇を受けた。

1872(明治5)年、初めて伊勢神宮に参拝したおり、雑然としているのを憂えその威厳を褒賞する志を持つに至った。その後縁あつ

て備前屋、太田家の養嗣子となった。備前屋は伊勢古市の三大妓楼の一つで、当時外見の派手さとは裏腹に多大の借金を抱えていたが、10余年で負債を解消し傾いていた家業を立て直した。その間、東京築地の隅田川沿いに川崎正蔵が創立した川崎築地造船所の開設などに従事し、伊勢に戻った。

(1) 財団法人神苑会の結成

神宮の尊厳を維持し、わが国の象徴である神宮とその町を国民崇拜の地域にすべきであ

ると、当時の県令石井邦猷、地元の医師大岩芳逸などが呼びかけ、太田小三郎が中心となって1886(明治19)年に財団法人神苑会が結成された。

伊勢市史には、
「彼が神宮の整備に尽くした功績は、想像以上のものがあり、御下賜金や、一般の寄付金711万円余の財源をもとにして、神宮周辺の民家183戸を撤去したり、2万余坪を買収して神苑の拡充を図り、さらには倉田山に4万坪の土地を買収して、徴古館・農業館を建設し、神苑文庫をつくるなど、活発な事業を行ったのである。」と記載されている。このように敬神家であるとともに事業家として、広い視野に立った近代的な都市開発の開拓者でもあった。そして1890(明治23)年、他に先駆けて地元の北川矩一(初代の宇治山田市長)らと伊勢神宮の参拝客を見込んで、参宮鉄道線を設立した。この路線は、現在JR東海の紀勢本線の一部区間(津～多気)と参宮線(多気～伊勢市～鳥羽)の元となった。

(2) 宮川電気株式会社の設立

1896(明治29)年に宮川電気線が設立された。地元の太田小三郎、秋田喜助などと、大阪グループの平川靖、岡部治助などによって進められた。当初の事業計画は、①宮川での水力発電所の建設と電気供給事業 ②宇治山田から二見を結ぶ電気軌道事業であったが、まず地元への電灯供給への許可が得られ事業を始めた。

翌年、宇治山田町の岩淵町に50kWの火力発電所を建設し、営業を開始した。(現在：中部電力伊勢営業所)三重県下では津市の津電灯に続いて2番目の電気事業者であった。

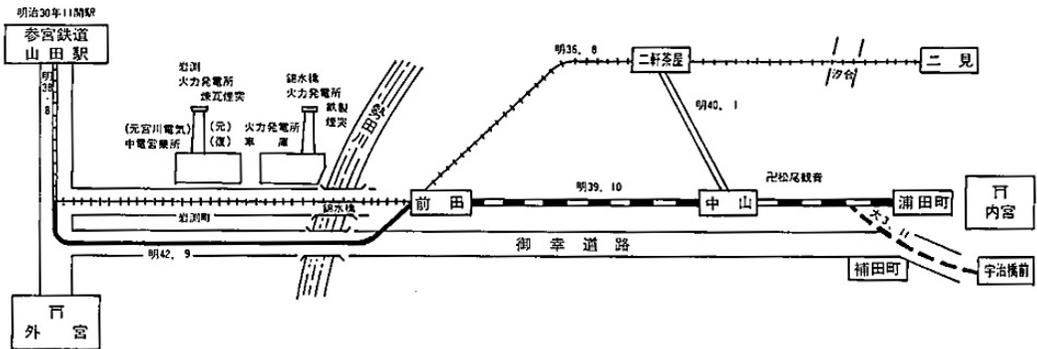
当時の工事に関する会社記録には

「当初、本社の設計たる度会郡小川郷村字一ノ瀬において宮川の流れを分水し、宇治山田町までの間に水路を敷設し、その水力を用いて電気を興し宇治山田市街に電灯を点火し、また同市外より東二見村に電車鉄道を敷設し、その余水は付近の村落灌漑の用に供する目的をもって、その関係水路および線路の測量を三重県庁に出願し、その認可を得て測量をするも営業上の都合により、開始早々はまず火力を持ってし、漸次水力を併用する方針を取り、さらに発電所の位置として岩淵町において敷地を購入せり、先ず煙突工事に着手し、明治30年3月24日起工、3月29日俊成せり、また発電所の工事に着手し電灯申込人の室内線取付および電灯柱の建設に着手し、いずれも目下工事にかかれり(一部現代用語に変更)」と記されている。

次いで1898(明治31)年に勢田川沿いの電車車庫敷地内に第二火力発電所(出力：50kW)を建設した。さらに電車の電力増強のため増設を重ね1921(大正10)年に櫛田川宮前で櫛田川第三発電所(出力：832kW)を建設した。同発電所は宮前発電所に改称し、現在中部電力に移管され、運転されている。

一方、電気鉄道の敷設は1902(明治35)年、山田～二見間(約8km)の工事に着工、翌年6月に竣工、8月から営業運転を始めた。そして伊勢電気鉄道線に改称し、引続き太田小三郎が社長に就任した。その後1913(大正3)年までに山田駅前～下宮～内宮～二見間の全線が開通し、伊勢神宮への参拝、伊勢・志摩地方の観光客に便宜を図った。

三重の電気史(中南勢版)を参考にすると、第一・第二発電所の所在地、路線図は次の通りである。



(3) 電気事業の推移

ここでは伊勢地方の電気事業の概要を取り上げていくことにする。

1922(大正11)に伊勢電気鉄道、津電灯、松阪電気の3社が合併し三重合同電気㈱が設立された。その後1930(昭和5)年に合同電気㈱と改称し、1937(昭和12)年に東邦電力㈱と合併し引継がれた。

(参考) 太田小三郎の養嗣子・^{おたのみつひろ}太田光熙について

太田光熙は養父・太田小三郎が1916(大正5)年に亡くなった後、家督を相続し、父の事業を継いで三重合同電気㈱の取締役、合同電気の社長、東邦電力の副社長に就任した。(平成25年12月号に掲載)

(4) 鉄道事業の推移

伊勢電気鉄道㈱が電気事業とともに鉄道事業を兼業し、全国から来訪する伊勢神宮参拝客の運輸を果たした功績は大きいものがあつた。

また、この中で特筆するものとして朝熊登山鉄道がある。1921(大正10)年、伊賀の電気王と呼ばれた田中善助が中

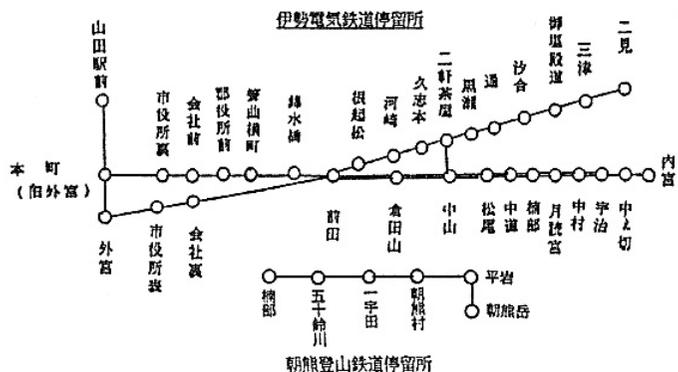
心となって設立された。

(参考) 田中善助については平成21年6月号に掲載

この工事はまず伊勢電気鉄道の楠部駅と朝熊を連結する軌道を敷設し、朝熊平岩から山頂に至る間は急傾斜のケーブルを架線したもので、当時東洋一の施設といわれた。1925(大正14)年に竣工し、1944(昭和19)年に太平洋戦争による資源枯渇のため不要路線として設備が撤去された。

この登山鉄道は朝熊岳山頂付近の古刹金剛証寺の参拝客の便宜を図ったもので、「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参宮」と宣伝し、後に三重合同電気と合併し両鉄道は一本化された。

なお、当時の伊勢電気鉄道と朝熊登山鉄道の停留所は次の通りである。



伊勢地方の電気事業と鉄道事業

1896	明治29	宮川電気 ^株 設立
1902	明治35	電気鉄道事業を開始
1903	明治36	鉄道工事完成(山田～二見間)
1904	明治37	伊勢電気鉄道 ^株 と改称
1921	大正10	朝熊登山鉄道 ^株 設立
1922	大正11	3社(伊勢電気鉄道・津電灯・松阪電気)合併し三重合同電気 ^株
1928	昭和 3	三重合同電気が朝熊登山鉄道 ^株 を合併
1930	昭和 5	合同電気 ^株 と改称
1937	昭和12	東邦電力 ^株 に合併
1939	昭和14	鉄道部門を独立し新都交通 ^株 設立
1944	昭和19	神都交通 ^株 三重県下の6社を合併し三重交通 ^株 設立

鉄道事業部門は三重合同電気^株の運輸部で統括され、1937(昭和12)年に東邦電力に引継がれ、1939(昭和14)年に鉄道部門を分離し新都交通^株として独立、1944(昭和19)年に三重県下の6社を合併し三重交通^株が発足した。

(5) 地元産業への功績

太田小三郎の事業は多岐にわたっており、

太田小三郎の略歴

西 暦	和 暦	履 歴 内 容
1846	弘化 3	鷹羽寿一郎の3男として豊前国英彦山で生まれる
1872	明治 5	備前屋こと太田家の養嗣子となる
1886	明治19	財団法人神苑会を設立
1890	明治23	参宮鉄道株式会社を創立し国鉄参宮線の基礎をつくる
1894	明治27	山田銀行を設立
1896	明治29	宮川電気株式会社を設立
1916	大正 5	病没

(寺澤 安正)